

特集 ひきこもり研究は今

藤本文朗

下記は、3人のひきこもりの男の子を持つ父親の気持ちを示した一文である。

「逃げ回ること風の如く
引き籠ること林の如く
批判すること火の如く
働かざること山の如し」

同じく、ひきこもりの子（50歳）を持つ親である私（81才）にとって、痛いほどよくわかる詩である。

ひきこもる人は、政府の推計で70万人、実際は100万人、人口の1%以上とされ、関係者（家族）を加えると300万人がかかえている問題といわれているが、研究が始まったのは、ようやくこの15年余りである。私が提案した本特集を受け入れていただいた本誌の編集委員会にお礼を述べたい。

「ひきこもり」は、特別な家庭に起こる問題と考えられているかもしれないが、そうではない。日本の若者が壮年に発達していくなかで、矛盾に直面することで起こる問題ともいえる共通の課題である。私が京都に来た外国人50人余りに英語で“HIKIKOMORI”を知っているか尋ねたところ、ほとんどの方が“No”，あるヨーロッパ人は、失業者と間違えて“アルバイトロス”と答えた。ただ韓国人のひきこもりは、韓国には1%いるといい、HIKIKOMORIに対応するハングルを書いてくれた。

ひきこもりの定義は、一般的にはまだまだわかりにくいですが、本特集の精神科医の漆葉成彦論文が、厚生労働省の定義と問題を整理して記述している。

ひきこもりに関する本は150余りあり、ルポ的なものから不登校と関わっての臨床的な研究など、2000年以後、日本精神神経学会が取り組んでいる。しかし学際的課題にとどまっている。

まさに多分野の研究者の集合体であるJSAこそが取り組むべき課題ではないだろうか。

本特集は、4人の専門家（医療、教育、福祉、障害児教育）の論文で構成されている。しかし話し合っただけで執筆されたわけではない。

この特集の素地になったのは、私が深くかかわって1年以上かけて集団討議をしながら完成させた本『ひきこもる人と歩む』（新日本出版社、2015年）である。構成は下記のとおりである。

はじめに

第1部 ひきこもる人の家族の思い

あの時間をどうすごしたか

ケーキ作りや家事労働をする中で社会参加
自分たちだけで抱え込むのは限界が……

「父はつらいよ!」—まだまだ迷走中

「不登校・ひきこもりを考える親の会」をつくって

「47歳のひきこもり」のわが子のこと

第2部 サポートする立場で考えること

第1章 生みの苦しみとしてのひきこもり

第2章 当事者自身から学ぶ支援のあり方

第3章 高校を拠点としてできること

第4章 ひきこもり支援の歩みと課題

第5章 精神医学の立場から

おわりに——親の願いと支援の理念

「はじめに」と「おわりに」と第1部の最後を私が担当した。

本特集は、他の号の「特集」に比べると不十分な点も多いと思われるので、ご批判いただきたい。JSAのかかげる会則の第2条「科学を人類の進歩に役立たせるよう努力する」に、ふさわしい特集であると自負している。

（ふじもと・ぶんろう：滋賀大学名誉教授、
障害者教育、高齢者の発達論）